

清宗根付館 便り

「心安らぐひとときをお過ごしいただきたい」と考えて企画・展示を開催。

当館では、400 点の展示のうち一か月ごとに企画展を開催し、月末最終日の閉館後に約 50 点の入れ替えをしております。

7 月～ 9 月は想い広がる自由な表現『根付の心と形』展と銘打ち、7 月は作家が制作し作家ご本人が付けた題材で「しりとりに」をする企画展、8 月は同音異義語や擬人化した作品などを題材にした作品を展示いたします。また 9 月は、当館公式 SNS (インスタグラムと X) で “いいね！” を多く集めた作品を展示いたします。10 月～

12 月までは時に育まれた悠久の浪漫「根付の時代絵巻」展と題し、10 月「きらめく王朝の美」展、11 月「秋の名品」展、12 月「ノスタルジックな根付」展、2025 年 1 月～ 3 月までは、「根付の奇跡」展と題し、1 月「運命の出会いと根付」展、2 月「カタチをまとった根付」展、3 月「結び合う世界と根付」展をそれぞれ開催いたします。

作家は、それぞれに個性的な作風を持ち、様々な趣向をこらしておられます。根付の魅力の一つでもある多種多様な作品を、

作家の視点 『平賀 胤壽』 ひらが たねとし

今回紹介する胤壽氏は明治から続く象牙彫刻の家系に育ち、超絶技巧を受け継ぎながら、短詩人としての顔も持ち、言葉を大切にしながら作品に活かしている作家として知られます。言葉と根付の関係を探る今回の企画展に合わせて、作品との向き合い方を寄稿いただきました。

「美術館に蝶をことりと置いてくる 柿本多映」
有名な作家であろうが無名の作家であろうが、生み出した作品の大半は駄作と思った方が良く…と言われます。
これは、よくある、「会心の作なんてありません」という作家自身による謙遜とは意味が異なります。また自分の作品は「排泄…」と、自虐的な、いやただ格好をつけた若い作家の発言を耳にしたこともあります。
「あなたの最高傑作はどれですか」と尋ねられた、ある偉大な建築家は、「次の一作」と答えたそうです…。けだし名言と察します。
冒頭に掲げた俳句は、滋賀・三井寺在住で畏敬する俳句作家の一句です。僕はこの「蝶」を自分の根付作品に置き換え、「美術館」とは言うまでもなく京都清宗根付館であります。
誰もいない或る日の根付館、その静謐で深閑とした一点に、会心の作？を、「ことり」と置いてくる。そうした矜持と余韻を懐に抱き、誰も気づかぬうちに去る。ほっとするのも束の間、「次の一作」を目指さねばなりません。僕にとってこの一句は、より佳い作品を「創刻」し、のこすための心構えであり戒めでもあります。

「ことり」とは、小さく硬いものが触れて、響き渡る音を意味する擬音語です。蝶という軽く柔らかなものと硬い響きという相克のなかに文学的な妙と「矜持と余韻」を漂わせています。
胤壽氏は根付が小さく制限の多いことから、よく俳句の五七五に譬えられます。五七五の言外からあふれ出す余情を大切に、根付でも形外の余白が必要といいます。烏に抱かれた骸骨が片目を少しつむり、嫌がっているのか、照れているのか、見る側の想像の余地を広げます。骸骨を歪ませることで言葉を引き出させ、感情を揺さぶる根付の余白とは、表現の奥に潜む本質に気づかせてくれるヒントとなります。



「抱耀」象牙・黒檀 高4.3cm

平賀 胤壽（ひらが たねとし）

1947年生まれ。1973年に根付制作を始める。制作テーマは、人物・動物・髑髏。象牙・木材を主に使用し、「白生地」「やしゃ染め」「顔料着色」を得意とする。川柳人としても活躍し、びわこ番傘川柳会幹事、朝日新聞「滋賀柳壇」などを歴任。



2024年 10月～12月の特別企画展のご案内

時に育まれた、悠久の浪漫。『根付の時代絵巻』展

- 10月「きらめく王朝の美」展 ■ 10月1日(火)～31日(木)
- 11月「秋の名品」展 ■ 11月1日(金)～30日(土)
- 12月「ノスタルジックな根付」展 ■ 12月1日(日)～29日(日)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第 9 回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）、家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHK プレミアム「美の壺」出演



公式サイトはこちらから▶



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、＜魅せる＞＜育む＞＜繋がる＞を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



現代根付

Contemporary
Netsuke
Newsletter

Salon

SUMMER-AUTUMN Issue. 17

〔目次〕

- 企画展の見所
- 根付館便り
- 作家の視点

〔発行元〕

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生
賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

想い広がる自由な表現『根付の心と形』展

根付は対象となる形象を映しとるだけでなく、心に描く「想い」を造形に託したり、言葉の意味から構成を練ったりしながら創作されます。それは根付に限ったことではなく、日本美術や工芸全般にも共通する特徴といえます。形が先か、言葉が先かという根付の発生の因果関係を紐解く試みとして、今回は言葉や文字と根付の関係を探ってまいります。根付の持つおかしみは、物事を側面から捉えて皮肉や洒落っ気を利かせることから生まれます。そうしたおかしみは往々にして、同音異義語を使った掛詞や、しりとりに、謎かけ、連想、擬人化など言葉の豊かな世界をまとうことが多く、

観る側にも日常に新たな視点をもたらしてくれるリフレーム効果の機能を持ちます。
7月は根付の題材の幅広さに着目して、題名を手掛かりにしながら「しりとりに」形式で作品の多様さを紹介します。
8月は言葉遊びから生まれる、根付の洒落心を感じさせる作品を特集します。
9月はSNSでおそらく根付を初めてご覧になる方々の反応をランキング形式で紹介します。前提知識もなしに根付と接したら、どんな言葉を引き出すことができるのかを検証します。

Expressions reflecting the heart
“The Essence and Mastery by Netsuke”

想いが広がる
自由な表現

根付の心と形の展

7月「根付しりとりに」展 7月2日(火)～31日(水)
8月「根付の言葉遊び」展 8月1日(木)～31日(土)
9月「SNS根付王座決定戦」展 9月1日(日)～29日(日)

公益財団法人 京都 清宗根付館
Public Interest Incorporated Foundation
KYOTO SEISHU NETSUKU ART MUSEUM
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地1 (壬生寺東側)

詳細はホームページで確認ください

SAGAWA PRINTING
佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

告知ポスター

7月

題名をつなげていくと、あら不思議!

7月2日(火)～31日(水)

「根付しりとり」展

現代根付のひとつの特徴として、作品に付けられた題名も作品の一部とされ、ひとひねりしていることが挙げられます。作家は作品の主題を引き立たせるために示唆に富む作品名を考えます。作品名によって作品に深い解釈を与えることになり、鑑賞のひとつの手がかりになります。多種多様な題材を扱う根付の魅力をお伝えするために、作品名に着目しながら「しりとり」でつなげていくという初めての試みでご覧いただきます。通常の企画展では一連の共通テーマで選びますが、今回は題名だけをつなげていくことで、奇想天外な組み合わせとなり、不思議な様相を呈することになるでしょう。

8月

言葉から生まれる新たな発見と冒険。

■ 8月1日(木)～31日(土)

「根付の言葉遊び」展

日本美術において言葉遊びは大切な要素のひとつで、根付においても主題を強調したり、豊かな連想を喚起させたりする際に使われています。日本語は同じ読みで意味を二つ以上持っている同音異義語が多いため、いくつかの意味を重ねることができます。例えば「いき」は息、意気、粹、生き、行きと解することができます。また動物や器物を擬人化して象徴的な意味を持たせたり、物語に誘導したりするなど謎解きの要素を持たせることもあります。さらに縁起や願掛けを込めた意匠も含めて言葉によって補完されるイメージは根付作品に重層的な解釈を与えてくれます。

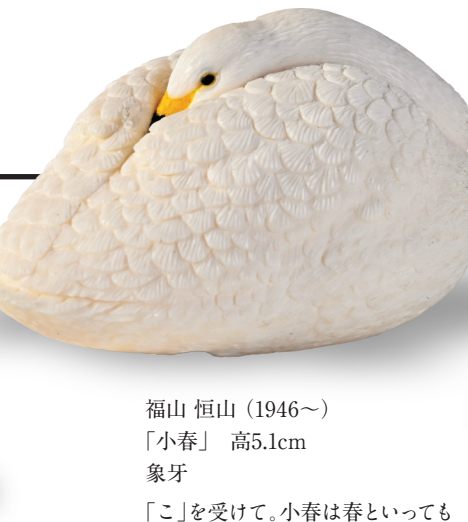
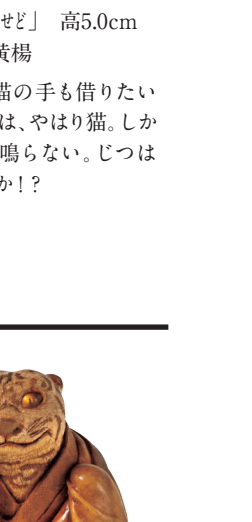
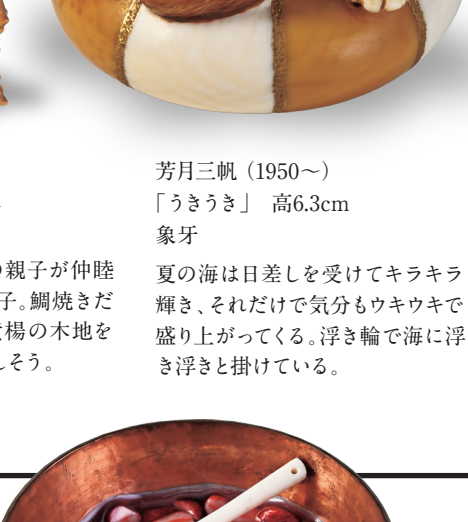
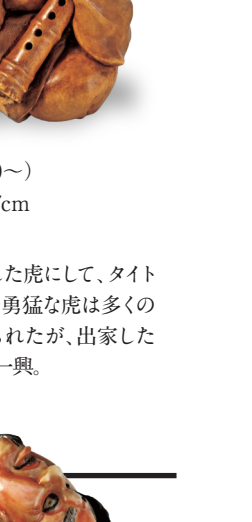
9月

狙うのはアクセス No.1。目指せ根付王!

■ 9月1日(日)～29日(日)

「SNS根付王座決定戦」展

当館ではSNS（InstagramやX）を開設し、その時期に展示される作品を公開してきました。当初写真だけでは根付の大きさや面白さがどこまで伝わるかという気持ちはありましたが、それ以上に国内外の多くの方からご覧いただき、フォロワーになっていただいたり、コメントをいただいたりと大きな反響をいただきました。とくに「いいね」を押していただけると私たちの励みになってきました。今回は、これまでSNS で紹介した作品を振り返りながら、「いいね」を多数獲得した作品をランキング形式でご覧いただきます。いわば読者投票から生まれた人気作品を考察も踏まえながらお楽しみください。

			
森 哲郎 (1960～) 「根付師」 高4.0cm 黄楊 まずは根付の「ね」からの始まり。根付師が根付師の根付を彫っているという入れ子構造になっている、洒落を利かせた作品。	阿部 裕幸 (1952～) 「しまった!」 高3.2cm 象牙 「し」を受けて。夏祭りの賑わいにつられ、はっぴを着た三毛猫が金魚すくい。勢いあまってボイが破れ、金魚も大笑い。	関根 かぶ (1972～) 「玉手箱」 高6.8cm 象牙・金泥・漆 「た」を受けて。たいへん豪華な玉手箱を大事そうに運ぶ狐の芸妓。箱に大事にしまっているのは宝珠か、油揚げか? 想像も膨らむ。	福山 恒山 (1946～) 「小春」 高5.1cm 象牙 「こ」を受けて。小春は春といっても初冬の穏やかな日と呼ぶ。日差しを浴びてキラキラ輝く湖面を渡る白鳥に想いを寄せて。
			
高木 喜峰 (1957～) 「環動」 高5.4cm 象牙・プレスアンバー 人類が初めて月面着陸したときの感動と惑星の循環軌道、メビウスの環と意味を重ねている。各素材の持ち味をいかした構成も見事。	向田 陽佳 (1968～) 「しろぼし」 高5.0cm 象牙 相撲はもともと神事として始まった。その勝敗は星取表で白星を勝ち、黒星を負けとした。トロフィーよろしく白い星を持ち上げている。	森本 節治 (1941～) 「水いらず」 高2.6cm 黄楊 見ての通り、鯛焼きの親子が仲睦まじく、水入らずの様子。鯛焼きだけに水も要らない。黄楊の木地を活かした質感が美味しそう。	芳月三帆 (1950～) 「うきうき」 高6.3cm 象牙 夏の海は日差しを受けてキラキラ輝き、それだけで気分もウキウキで盛り上がってくる。浮き輪で海に浮き浮きと掛けている。
			
上原 万征 (1975～) 「自在滑饅頭根付」 高5.1cm 銀・セイウチ牙・水牛角 SNSで圧倒的な話題を集めた作品。銀で作られた蟹は、足の関節を動かすことができる。超絶技巧の自在置物を根付にした新規性が目を惹いた。	森 謙次 (1974～) 「お歳暮」 高3.8cm セイウチ牙 かつてお歳暮の定番といえば新巻鮭。最近では北極の棲む白クマにも届くらしく、珍しい贈り物に驚いている。ほのぼのした物語性が人気を呼んだ。	井上 猛 (1940～) 「根付道具」 高3.0cm 黄楊・象牙 根付師ならではの刃物やノコギリなど道具一式をミニチュアで再現。実際に引き出しから道具がとり出せるのぼのした物語性が人気を呼んだ。	星野 磁佑 (1999～) 「いちごジャム」 高5.4cm 銅・真鍮・樹脂・鹿角 平成世代の作家ならではの斬新な発想と、技術の高さから新機軸を打ち出し、評価の高かった作品。苺もすべて鹿角から彫られている。
			
岸 一舟 (1917～2017) 「面づくし」 高4.5cm 象牙 さまざまな能面を彫りながら、根付ならではの楕円体にまとめたインパクトのある作品で、SNSでも新鮮な驚きから多くの人の目に留まった。			